

「ひと」と出会う教室

ドイツ教職メガネ作
高野恵美子 絵

「ひと」と出会う教室

さいはて社

* 本著作物の全部または一部を著作権者およびさいはて社に無断で複製・転載すること、および放送・上演・公衆送信（ホームページ上への掲載を含む）などをすることを禁じます。また、本著作物の内容を無断で改変・改ざんなどをする 것도 禁じます。有償・無償にかかわらず本著作物を第三者に譲渡することはできません。

「権利者情報等」

もくじ

プロローグ

「いのち」論争―ドイツっ子達の「オエー」に関するお話

食育論争勃発

菜食主義はいのちを犠牲にしないのか？

誰が「害虫」と「益虫」を定義しているの？

自分の「意見」と他人の「意見」と

テオドアといういいじめっ子のお話

暴君テオドア

子ども達と一緒に学校を「作る」？

蛇の道から、新しい道へ

テオドア―新しい始まり

アメリカから来たジャステイス三きょうだい

トムという少年

電撃―ジャスティス学級訪問

攻撃される「隙」はどこに生まれるか？

校長会からの刺客？

メガネバツシング

ジャスティス制裁モードが導いた終末

教育移住―いじめられたソンジュン

教育移住つ子供達を取り巻くいじめの問題

ドイツの教師ガチャ

言ったもの勝ちでは済ませぬ

人種差別といじめの実態

苦悩のソンジュン

喧嘩仲裁係の危機

喧嘩勃発？

大人たちの闘技場

未来をより良く

ドイツ男児達と汚トイレ騒動

ドイツの汚トイレ

ヘリコプター・スプラッシュ

「議論つてどこからが干渉？」 論争

アントンの咆哮^{ほうこう}、エミリアの苦悩

意見を言う側の問題なのか？

「意見を言う側」と「受け取る側」と

意見のぶつけ合いから対話へ

出会い ― 人種差別とメガネ学級の子ども達

アフリカ人の担任教師？

初の保護者会

子ども達との新しい出発

ヨルク四天王とメガネ

「ひと」として出会うこと

黒髪の天使ガブリエルからの贈り物

対等な「感覚」はどこから？

人種差別の闇と小さくそれでも確かな光

カリンと発達障害のお話

気持ち悪いうさぎ

かわいそうなカモの話

手加減しないこと、本気でぶつかること

エマとテオドアの恋愛騒動

ドイツの学校での恋愛事情

二人の遅刻

ドイツで出会った性教育モデル

生命が産まれる不思議へ

その感情は不安なのか？

真剣に付き合うということ

エミリアとルカの「自己肯定感」のお話

それは自己肯定感なのか？

ドイツっ子達の練習嫌い？

「良い学習者」とは

かりそめの自己肯定感を越えて

エピソードーさようなら、メガネ学級の生徒達

あとがきー「ドイツ教職メガネ」アカウント開設の裏話

プロローグ

ドイツの朝。

ゴミだらけの汚い道を歩き、汚すぎて座れない便所のある駅を歩いて抜ける。朝から酒を飲んで酔っぱらいとか、（おそらく）ヤク中のグループの前を通り抜け、スーパーに向かう。スーパーでは、よく腐り気味の野菜や果物が売られている。店員が、陳列ちんれつされた肉のパックの上に、若干、靴で乗りつつ、上の棚に新しいパックを陳列ちんれつしている。レジ係が、商品を袋に詰めるのが遅い俺を見て舌打ちする。ラップは全然綺麗に切れない。伸びる、変に千切れる。

電車の時間はあくまで目安。時間通りに来るのか、そもそも走っているのかもわからない。車は日本車とか高級車以外はよく壊れる。役所の電話はつながらない。病院も電話がつかない。診察予約が数ヶ月待ちになることもある。配達員は、インターホンを鳴らしてから、俺が玄関に出る前に、荷物を床に置いてサインももらわずに立ち去る。

学校の食堂では、「オエー、まずい！　こんなの食えないよ！」と文句ばかり言う児童・生徒達がいた

り、ほぼ手付かずの食事が返却されていたりすることもある。インターネット回線は通信速度が遅く、よく接続不良になる。

一応、色々決まりはあるが、守るかどうかは個人の判断。右にも左にも倣^{なら}わない。

いつもと変わらない、ドイツの朝。家に帰り、まだ埃^{ほこり}まみれだったメガネを拭く。もし教室で授業をしていたら、癒やし系生徒のレアンダーに「メガネ先生、メガネ拭きなよ」と言われていただろう。ドイツの現地校で、それまでは専科教師だったメガネが担任教師になって久しい。夏は涼しく、冬は暖房を切れば凍死しそうなアルトバウ（建築年が古く、スタイルも基本そのままの住宅）にて、このドイツでの教職体験から創作された物語を綴^{つづ}っている。

ドイツの学校では、言いたいことを遠慮なく言う「口閉じぬ国」に生まれた口撃^{こうげき}力の高い子ども達と保護者、そして教師達が「戦国」を形成している。新任の頃、下ろした長い髪を後ろで縛^ひって長めの髭^{ひげ}を蓄^{たくわ}えていたメガネを「ザムライ（侍）」と呼ぶ子達もいた。「オチムシャと呼べ」とひとまずジョークで返してから、「いや冗談はよして、そういう呼び方はやめなさい」と戒^{いまし}めていたが、メガネにとってこの侍のイメージは、「戦国」ドイツの学校のイメージから、そこまでかけ離れてはいない。

メガネと同時期に赴任した新任教師達の中にも、この戦国を耐えきれなかった人達がいた。単純に子ども達や同僚とのコミュニケーションが問題となることもあれば、メガネ達のような外国人教師にとっては、人種差別が問題になることもしばしばである。かくいうメガネ自身も、教員になる前から数えきれないぐらい

人種差別の被害にあい、学校にもそういう傾向を持った子ども達や保護者、あるいは同僚達がいるであろうことも知っていた。そもそもドイツで教師になれるのか、なるべきなのかと悩んでいた時に、ドイツの教員養成時代の恩師がくれた言葉を今でも覚えている。

「出身地とかどうでもいい。教師は、毎日世界に働きかけられる。日本でもドイツでも。世界を変えていく苗木に水をあげられる。自分が日本人でも関係ないと思えるぐらい、素敵な事が君を待っているよ」

辛く、苦しい事の多いドイツの教職生活。それでも、恩師の言っていることは正しかった。メガネのことを「ひと」として見てくれた人達がいた。この人達がいなかったら、この本も存在しなかっただろう。メガネは毎朝起きるたびに思う。この国で教師を続けていきたい。子ども達の笑顔、子ども達から届く手紙やメッセージ、別れの時の涙。これはどの国にいても宝物だから。

ここで綴^{つづ}られるエピソード達は、「ドイツ教職メガネ」が、今までにツイッター（現在のエックス）で呟^{つぶ}ってきた創作物語をまとめ、表現などをより明確なものに修正し、内容を加筆したものである。「子どもに読ませたい」とのコメントもあったので、ルビも比較的多めに振ってある。テーマは菜食主義、議論の仕方、教育移住、いじめ、恋愛騒動、性教育、人種差別、自己肯定感など多岐^{たき}に渡る。また、今回書き下ろしたエピソードも掲載されている。

これらのエピソードは、メガネの教職体験をもとに創作された物語である。もちろん、ドイツの学校にも個人情報取り扱いや守秘義務に関する規定があるが、それについては勤務校にも確認した上で、実体験を

フィクション化することにした。

各キャラクターは、メガネが体験した人間関係、モデルから抽出され、創作された人物や生徒達である。そして、メガネ自身も、創作された人物であると同時に、この作品を創作しているという曖昧な存在である。

いずれにせよ、大変思い入れが強い、このドイツでの教職体験をフィクション化してお届けできることを嬉しく思う。キャラクター達の言動を通して、読者は、ドイツの子ども達や大人達のリアルを追体験できるだろう。あとがきでも触れるが、ここに描かれた授業の手法や子ども達との関わり方で、実際に、一步一步成長していった子ども達と、一人のメガネ教師がいたことに変わりはない。

この物語、子ども達とメガネの成長が、誰かの心に届くならば、また、その誰かの役に立つのであれば、それ以上に嬉しいことはない。

「いのち」論争——ドイツっ子達の「オエー」に関するお話

食育論争勃発

七年生の教室。ある日、休み時間明けにカロリーネ（通称カロ）が泣いており、慰められていた。遠く座っている子達が不自然にニヤニヤしていて、すぐさま「あ、こいつらだな」と思った。慰めている子達曰く、カロは休み時間中にハム入りのサンドイッチを食べていた。そこへ、肉食主義の子達が寄ってきたそうだ。そして、

「オエエエー！　どんな風に動物達が殺されてんのか知らないんだああ！」
といった発言を繰り返したとのこと。

元々は数学の授業、一次方程式の予定だった。「夜なべ」して作成した問題用紙と子ども達を交互に見てから、予定変更を決断。授業の！　初めに、食育タイムである。

「さて、カロが泣いていますますが、誰が関係してるの？」

答えたのはエアネスだった。

「先生、自業自得です。なんで泣いてるのかわからない。オーバーリアクションです」
「なぜ？」

「だって、肉食べてる人達は、間違ってるから。動物達が屠畜場とちくじょうで無惨に殺されてるの知らないだけ」
「ほう」



この時点で「ついに来たか」と思った。というのも、エアネスの父がかなり激しい菜食主義者なのを知っていたからだ。エアネスの父は、保護者会でも、時々、何か菜食主義に関わるテーマが出ると、水を得た魚のように話し出すタイプだった。これは激しい舌戦ぜっせんになるだろうなと思った。

「クラス全員、エアネスが言ってるみたいに思う？」

そこで挙手したのは、泣いていたカロリーネの親友マリー（ちなみに、ドイツに挙手はない。ピンと挙手してしまうとヒットラーの敬礼に見えてしまうのも、その理由の一つだろう。人差し指を挙げるので、「挙指」の方が正しいが、ややこしいので、ここでは挙手という言葉を使用する）。

「オーバーリアクションは、エアネスの方です。めっちゃ干渉してるし、自分が食べてる時に『オエー』とかされたくないです」

エアネスはそこにすかさず割り込み、喰ってかかろうとする。

「いや、でも肉を！」

「ちよつと、待ちなさい。手を挙げずに割り込まない。あなたに確認の質問をします。あなたは、食事中に『オエー』と言われてもいいの？」

「肉を食べているのが悪いので、そういうことをされても仕方ないです」

「いや、あなたは質問に答えてない。あなたが好きなものを美味しく食べている時に、人から『オエー』と言われたのかという質問です」

「……えーと……それは嫌です」

「じゃあ、違う伝え方があったのでは？ 誰か良いアイデアはありますか？」

若干、緊張気味に、話の行く末を見守っていたファビオが挙手。

「食べてない時に、議論するとか？ 食べてる時に言われると嫌だね」

「そうだね、それならまだオープンだね。エアネス、まずは、『オエー』に関してカロリーネに謝罪をしない。あなたも含めて皆『オエー』とされるのは嫌でしょう」

エアネスは少々ムスツとしながらも、きちんと目を見てカロリーネに謝罪。

「さて、議論しましょう。あなたはさっき『肉を食べる人は間違っている』と言っていました、なぜそう思うのですか？」

菜食主義はいのちを犠牲にしないのか？

「さて、エアネス。なぜ、食肉は間違っているの？」

「だって、動物がかわいそうでしょ？ 豚とか牛とか鶏とか。切られて死んで、体バラバラにされて、食べられて。自分が同じ目にあうこと考えたら無理。してはいけないことです」

「なるほど。つまり、肉を食べることはそのかわいそうな動物達の犠牲の上に成り立っていると」

「そうです！ 不必要なことだよ！ 間違いです」

「君は菜食主義ってことだね？」

「はい」

「そう。ありがとう、教えてくれて。肉を食べることに犠牲があり、農作物などを食べることに犠牲が無い？」

「そうです」

「クラスの皆はどう思う？ 彼の意見に賛成ですか？ 反対ですか？ ちょっと時間を取るので、隣の人同士で話してみてください」

隣の人同士での意見交換を終え、クラス全体での意見交換を開始すると、クラスの大体三分の二が、エアネス派。残りの三分の一が反対派となった。反対派劣勢である。「動物を殺せるなんてひどい！」「痛みを君達は感じないのか」などと批判の嵐であった。また補足すると、必ずしも全員が菜食主義ではない。「食肉をするのは、本当はよくないけど、している」という子達もいるのである。

こういった議論が勃発した^{ぼっぼっ}場合、メガネが常日頃気をつけていることは、あくまでファシリテーターとして振る舞い、自分の意見を押し付けないこと。これにしくじると、後になって保護者との激しい議論に発展することもあるから、というのも理由の一つだが、それだけではない。

少々緊張気味に、状況を観察する。「でも肉はうまい」とか「私達の勝手でしょ」というような論点で反対派が苦しくなる中、場合によっては俺も重い腰を上げて論点を増やすべきかと思っていたところ、手を挙

げたのは農家の娘エマだった。普段は活発に発言するエマ。でも今回は、珍しく議論に参加してこなかった。今思えば、この間彼女は、自分自身の考えを整理していたのかもしれない。

「えーと、うち、農作物育てているけど、たくさんのお虫とかがそれで死んでると思います。犠牲が無いとは言えないと思います」

肉食批判の子達の一部から嘲笑ちようしょうが起こる。

「だって害虫とかじゃん」

「先生！ そんなことまで言ったら何も食べられません。議論になりません」

ざわつく学級。エマも少々気まずそうにしているが、自分の意見をきちんと言えるのが彼女の強さ。

とりあえず、生徒達を落ち着ける。

「そうなの？ 皆さんに聞くけど、例えば、害虫という命とあなたの方がかわいそうだと言っている食用の動物達の命に違いはありますか？ 少し話し合ってみてください」

話し合い終了。そして全体での意見交換を再開する。

エアネスやレア・ゾフィーと話していたエミリアが挙手。

「エマが言っているのは害虫の話なので、しょうがないことだと思います」

「君達は、俺の質問きちんと聞いていた？ 俺は、『命に違いはあるか？』って聞いたの。数分あげるからもう一度話し合って、それに答えてください」

そして、話し合った末、レア・ゾフィーが挙手。

「えーと、違いがあると思います」

「なるほど。どうして？」

「害をなす命と、害をなさない命があると思うからです」

「そういう風に考えるんだね。他の皆はどうですか？」

農家の娘エマは譲らない。

「違うと思います！ 私は命であることに変わりはないと思います！」

ここからは生徒達の頭がパンク状態になり、議論が数分間、堂々巡り。今日はこの辺が引き際だろう。作成された数学の問題用紙達が、寂しそうに教卓に横たわっている。数学の前に、すでに生徒達の脳がオーバーヒート気味なのは明白だったが、今は雰囲気を変えるべきだと判断。

「さて、皆さん、とても良い議論のポイントまで辿り着いたね。今あなた達の意見の違いが見えてきているね。でもね、そろそろね、数学もやらないといけない。だからここで一度ストップして、このテーマは宿題にしましょう。明日までに、この『命の違い』について考えてきてください。特に害虫に関してですが、害虫が『誰に』害を及ぼすかを考えてきてください」

誰が「害虫」と「益虫」を定義しているの？

エピソード ― さようなら、メガネ学級の生徒達

メガネ学級のこのエピソード集も、ずいぶんと長くなってしまったので、エピソードは短くして、この本を綴り終えよう。

今でも覚えている。あの子達の顔と声、時には笑い合い、時には悲しみを共有し、時には怒ったあの日々を。日本生まれのメガネがドイツで出会った子ども達を。

メガネ学級との別れは、ここで詳しくは書かない。それでもはつきりと言いたいことは、プロローグで紹介した恩師の言っていた事は本当だったってこと。これ以上に素敵な教職生活がこれから先にも訪れるだろうか、と思ってしまうぐらいに幸せだった。涙ながらに、メガネと握手をして別れを惜しむ生徒達、クールに別れの挨拶をしていた子達。反応は様々だったが、今でもアントンが言っていた事が忘れられない。

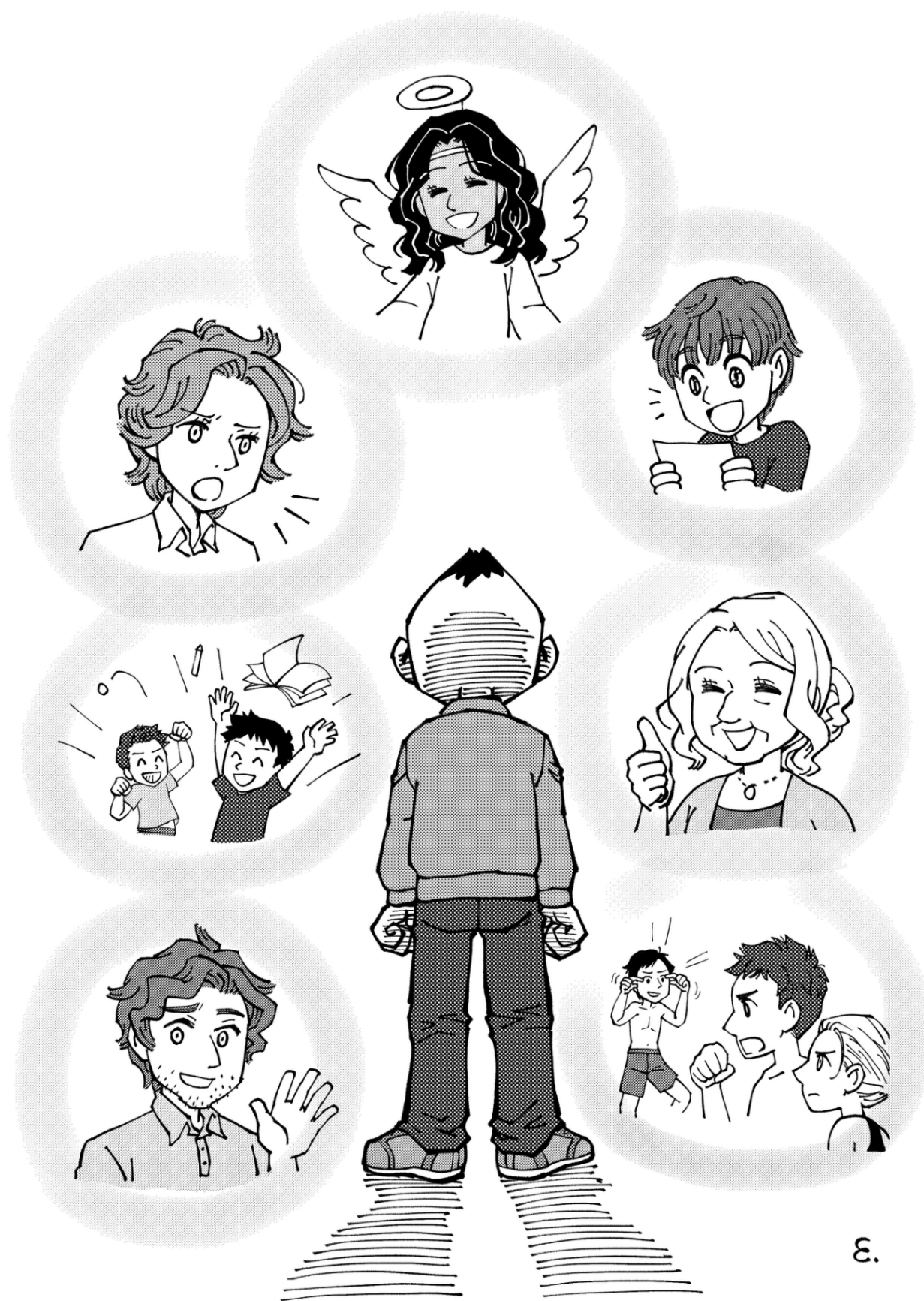
「メガネ先生、誰にでも平等で、真剣で、優しかった」

メガネのもとで、大きくなっていった子ども達。そして子ども達のもとで、大きくなっていったメガネ。メガネも子ども達も、この思い出を胸にしまって前に進むのだろう。別れの後に、ファビオの母が手紙をく

れた。

「一つの扉が閉じたことは、もう一つの新しい扉が開くことを意味するのですから」

これからの新しい子ども達との出会い、ドイツにて続く教職生活に胸を躍らせつつ、このエピソード集を綴り終えることにしよう。最後まで読んでくださった読者の皆様、本当にありがとうございました。



ε.

あとがき ― 「ドイツ教職メガネ」 アカウント開設の裏話

二〇二三年六月、メガネはツイッターアカウントを開設した。日本に住む友人に「ドイツの学校ってどんな感じ？ メガネの体験を発信したら面白いんじゃない？」と言われたのがきっかけだった。

そこで、ドイツでの教職体験を可能な限りシェアしたいと思った。当然ながら、守秘義務やプライバシーの問題はまず初めにクリアにしておかないといけないテーマだと思い、自分自身で調べ、勤務校の担当者に確認することとなった。そこで得た認識は、「児童・生徒を匿名化、学校の名前や場所を言わなければ、事実そのままを投稿しても、全く問題ない」ということだった。「え、そんな単純な処理だけで大丈夫なのか？」と思ったのを覚えている。この教職体験を日本に届けたいが、メガネ個人としては、もつとプライバシーに配慮はいりよしたいと思い、エピソードを創作する際に、人物描写や状況・場面設定に変更や設定を加えたいと思った。

また、自分自身も匿名でもう一つアカウントを運営することにした。「ドイツ教職メガネ」という名前には、特別な意味や思い入れはなかった。単純に匿名化できる名前を探して、それに行き当たっただけであ

る。結局、辿り着いた先は、プロローグに書いた文言に表現されている。

これらのエピソードは、メガネの教職体験をもとに創作された物語である。もちろん、ドイツの学校にも個人情報の取り扱いや守秘義務に関する規定があるが、それは勤務校にも確認し、実体験をフィクション化することにした。各キャラクターは、メガネが体験した人間関係モデルの中から抽出され創作された人物や生徒達である。

ツイッターを始めた頃から、書籍出版の話が出るまで、アカウントの方向性が曖昧なままで、一貫性のない呟きも多々あったことをお詫びしたい。また登場人物が「仮名」であると呟いたり、あたかもエピソードを事実そのまま書き起こしているかのようなキャラ作りをしたり。そう、教職メガネのアカウントは、キャラ設定がブレブレだったのだ。完全ノンフィクションだと思って読んでくれたフォロワーの皆様には、大変申し訳ないと思う。

それでも、具体的な体験が濃厚すぎて、このような抽出処理を経た後でも、このエピソード達を「フィクション」と呼びたくない意地とこだわりが、メガネには最後まであった。これらのエピソードを読み返すと、ドイツで出会った様々な人達や生徒達が、各キャラクターを通して、生き生きと顔を出してくるからだ。

しかし、ある時、これまたドイツで教職に就いている日本人の親友から、「様々な実体験から抽出された人物やエピソードって、それ、架空の人物や物語じゃん。フィクションじゃん。小説じゃん。認めなよ」と

言われてから観念して、「創作」や「フィクション」という言葉を使用することにした。

つまり、それぞれのエピソード自体が、メガネ自身の数多くの体験をもとに創作されたものである。食育の論争は、公私にわたって、何度も起こったし、それをファシリテートしたことが何度もあった。喧嘩仲裁係を取り入れている学校も多くあり、メガネが関わっただけでも数校。両手で数えきれないぐらいのテオドアタイプの生徒達が、このシステムで新しい人生を発見している。アメリカ出身の子達との経験も多く、その諸経験の中からジャスティスキょうだいの人物像も抽出されている。また、ドイツで見つけた性教育モデルの授業内容自体はノンフィルターだが、授業実践という意味では何度も行っていて、ここで綴られているエピソードは、そこで起こった様々な出来事から抽出された集大成である。

ここまでの処理をしてこの教職物語を創作していたのには理由がある。それは、このエピソードが日本の誰かの役に立つて欲しいということ。

文化の摩擦というものが、どのように存在しているのか。人は、どのようにして人種差別と向き合えばいいのか。教育移住をする際に考えた方がいい事は何か。愛やセックスについてどのように啓蒙するべきなのか。議論のあり方とは何か。本当の自己肯定感とは何か。

これらのテーマに関する実体験をお届けするために、これを一貫したエピソードに創作するのが一番伝わりやすいと思ったのである。そして、プロローグでも書いたが、実際に、メガネが描いてきた授業の手法や子ども達との関わり方で、一步一步成長していった子ども達も居たことに変わりはない。このエピソード集

で語られたことが、日本の読者に届き、これを日本の子ども達の教育にも活かしてもらえたならば、それ以上嬉しいことはない。

最後に、書籍出版について。メガネのツイッターアカウントのフォロワー様が、驚いたことに一万人を超えた二〇二四年の一月、相互フォローのある方から突然のメッセージが来た。「さいはて社」の社主、大隅さんと縁えんのある方で、メガネのアカウントをご紹介しますくださったのだった。今回、メガネのツイートの書籍化に関し、大隅さんから頂いた多大なるご支援・ご協力に感謝の意を述べさせて頂きたい。大隅さんは、書籍の内容や校正に関してだけではなく、メガネの状況、病状、これからの人生のことも含めてヒアリングしてくれ、どんなテーマでも親身になつて話を聞いてくださった。こんなありがたいことがあるだろうか。さいはて社でこの書籍を出せることを、とても嬉しく思っている。

そして、この書籍の各シーンを生き生きとした形で表現してくださった、絵師えみこさんにも感謝が足りない。もともと、もし書籍化して挿絵がなくなら、ぜひともドイツの雰囲気を知っている絵師の方に描いて頂きたいと思っていた。ツイッターでメガネのエピソードを読んでくださったえみこさんは、同じくドイツ在住でドイツつ子たちとの経験も豊富。これ以上の方はいらっしやらないだろうと思っていたので、えみこさんとタッグが組めたことに心が震えた。

お付き合い頂いた読者の皆様、ツイッターアカウントをここまで育ててくださったフォロワーの皆様、大隅さん、そして絵師のえみこさんに、心からの感謝をお伝え申し上げます。

メガネは、きつと今日も、そしていつか生まれ変わっても、ドイツのどこか彼方で教師を続けていると思います。また新しいエピソードが生まれて、まとめたものをお目にかける時がくるまで、皆様も良き日々をお過ごしください。

ドイツ教職メガネ

著者プロフィール

ドイツ教職メガネ（どいつきょうしよくめがね）

処か彼方のドイツ現地校の担任教師。日本生まれ。成人してから渡独。ドイツでの教育学研究を経て、教職現場にたどり着く。生まれ変わってもドイツで教師がしたい人。



画家プロフィール

高野恵美子（たかの・えみこ）

イラストレーター。東京生まれ。オツフェンバッハ美術造形大学卒業。日本の漫画スタイルのキャラクターデザインを得意とし、日本文化を紹介及び普及させる活動にも励む。



「ひと」と出会う教室

二〇二五年五月五日 発行

著 者 ドイツ教職メガネ

挿 画 高野恵美子

発行者 大隅直人

発行所 さいはて社

Website: <https://saihatesha.com>

E-mail: info@saihatesha.com

校 正 田中奈保生

組 版 田中 聡

装 幀 早川宏美

*本書は、ご覧になる機種により、画面表示などが異なる場合があります。